

VOL.
60

シイビブリア

夏に読みたい！おススメの本紹介

中野長者伝説 開拓者、鈴木九郎と郷土の記憶

中野区立上高田図書館

子どもをあと押し！地域のちから



水木しげる / 著、
角川書店、2009年、
所蔵：中央

・屍のような人生

第1章から4章まで、怖い噂話や不思議な場所にまつわる逸話など、異なる種類の怪談が稲川淳二の独特な語り口で書かれている。読んでいて背筋がゾクゾクする話がほとんどという印象だが、結末が切なくて寂しい幽霊のおばあさんの話などもあり、バラエティー豊かな一冊だ。

現在も年間50回ほど公演を開催し、今までに500話以上もの怪談を語っている怪談家、稲川淳二。今までに語った怪談から、不朽の名作といわれる40話をピックアップしたのが本書だ。



稲川淳二 / 著、
講談社、2021年、
所蔵：江古田

・稲川怪談 昭和・平成傑作選



また、作中では戦時下についても振り返っている。鳥取連隊へ入営直後は、上官からビンタを浴びる毎日だったが、根がのんびり屋だった水木は、演習さえこなせば食事がたらくく食べられるため、割とほがらかに過ごしていたらしい。このような彼の人柄も分かるエピソードのほか、貴重な当時の写真や妖怪画・年代別の主作品なども収録している。現代のあわただしい世の中だからこそ、激動の時代の中であっても、自分のペースを崩さなかった水木の生き方から、学べることの多いおススメの一冊だ。

妖怪漫画などで有名な水木しげる。その誕生から88年を記念して出版された一冊で、彼の生涯について紹介している。





はじめに

昔話と伝説の違いは何か？ 昔話はどこでも同じような話が伝わっているが、伝説は植物のように一つの土地に根を生やし、常に成長して行くものだ、とは民俗学者、柳田国男の指摘である。

中野に伝わる伝説の代表格は、中野長者伝説だ。中野という地名は武蔵野台地の中央に位置していたことに由来し、元来は現在の中野坂上から西新宿あたりの一帯を指す呼び名だった。そのため中野長者ゆかりの伝説も、そのエリアを中心に点在している。その中から、中野東図書館の近くにある成願寺と淀橋にまつわる伝説を紹介しよう。ちなみに「中野長者」こと鈴木九郎（1372頃―1440頃）にまつわる伝承は、6世紀の間に様々なエピソードが付け加えられ、互いに矛盾する多様なバリエーションがあるので、ここに記すのは、そのごく一例である。

九郎、長者になる

鈴木九郎が妻と共に中野に住み着いたのは、室町時代初期の応永年間（1394―1428）のことだ。都では、足利義満が將軍職を息子へ譲って出家し、金閨寺を造営したり、日明貿易を始めたりしていた頃だ。

その時分の中野は武蔵国多摩郡中野郷といい、一面の草原だった。九郎は牛馬の売買をする馬喰と、未開地の開拓をしていたが、生活は楽ではなかった。ある日、やせ馬を馬市へ売りに行く道すがら、浅草観音に寄った。そして「馬が高く売れますように。もしお代の中に大観通宝が混ざっていたら、すべて奉納します」と祈った。当時、宋銭の大観通宝は貴重な通貨だった。馬は一貫文（現在の10〜15万円）で売れたが、改めて代金を見ると大観銭ばかりだった。これを納めてしまえば手元には何も残らない。しかし九郎は誓いを守って、全額を奉納した。

帰宅すると、家には黄金が満ちあふれていた。観音様の靈験すみやかなことに感激した九郎夫妻は、熊野権現を祀る祠を建てた。これが現在、新宿中央公園の脇にある十二社熊野神社の起りとされている。九郎は紀州和歌山の熊野神社の神官、鈴木氏の末裔で、元は武士だったという。

彼は中野郷から神田川をはさんで隣接する豊島郡角筈村（現新宿区）にいたる一帯の土地も購入した。その地を開墾して年々豊かになり、神田川を見下ろす高台に屋敷を建て、中野長者と呼ばれるようになった。

中野長者の寺、成願寺

寺の縁起 九郎夫妻には小笹という美しい一人娘がいたが、18歳で病死した。夫婦は深く嘆いて出家し、九郎は正蓮、妻は妙珊と改名した。邸内に娘を供養する持仏堂も建て、寺号を正観寺とした。娘の戒名「真窓正観禅女」にちなんだ名である。

九郎が65〜69歳で亡くなる頃、屋敷は立派な寺院になっており、没後はそこに葬られた。同じ境内に熊野神社も祀られていたが、江戸初期の1628年に神社と寺院は分かれて、正観寺は現在の場所（中野区本町）に移転した。その際、寺号を成

願寺と改めた。「成願」は「所願成就」から来ている。九郎の墓も、江戸中期の享保年間（1716―1736）に成願寺へ改葬された。

腹籠りの開山像 寺院創建の際、建物や敷地の提供など財政面を負担した者を「開基」、初代住職のよいうな宗教面の創始者を「開山」という。成願寺の開基は鈴木九郎で、開山は川庵宗鼎（生年不明―1536または1546）だ。九郎が帰依していた曹洞宗の高僧、春屋宗能禅師（1382―1456）の曾孫弟子に当たる。

成願寺境内の開山堂（龍鳳閣）には、宗鼎和尚の開山像が安置されている。江戸時代の作で、70センチほどの坐像だ。この開山像は腹籠りだ、胎内には宗鼎和尚自身の遺骨が納められている、という言い伝えがあった。複数の木材を組み合わせて造る寄木造りの木像は、内部が空洞になっている。こうした仏像の胎内に舍利（仏陀や聖者の遺骨）や、小型の胎内仏、経典や願文などが納められていることを腹籠りという。

果たして1972年に開山像を修理解体した際、胎内から細かに砕けた骨の破片が出てきた。それを人類学者の鈴木尚（1912―

2004）が鑑定した。彼は解剖学者でもあり、縄文時代から現代までの人骨を研究し、日本人の体格や容貌の変遷を明らかにするなど、骨格人類学の研究で知られている。

鈴木博士の約10か月にわたる研究の結果、胎内の骨片は火葬された2体の人骨と、犬の骨と鑑定された。人骨は筋骨逞しい熟年の男性と、小柄で病弱らしい二十歳前の女性のものであった。室町時代の遺骨のようで、初めは骨壺に納めて土葬していたのを後年になって掘り出し、その一部を開山像の胎内に納めたらしかった。これは鈴木九郎と、娘の小笹と愛犬の遺骨で、墓の改葬時に掘り出されたのを供養するため、開山像へ納入したものと推定された。

現在では九郎と小笹の遺骨は分骨され、一部は開山像に、一部は九郎の墓に納められ、一部は寺院内で保管されている。

淀橋伝説

姿見ずの橋 淀橋は成願寺の近く、青梅街道が神田川を横切る地点に架かっている。この橋は、かつて「姿見ずの橋」と呼ばれていた。それにはこんな言い伝えがある。

鈴木九郎は元来、善良な男だった

が、財を築くにつれて猜疑心が強くなった。財宝を家に置いておいては安心できないので、原野の人気のない所に運んでは埋めていた。その隠し場所が漏れるのを恐れ、財宝を運ばせた供の下男を帰りがけに橋の上で斬り殺しては、神田川へ投げ棄てていた。橋を渡る時には一緒にいた下男が、帰りには姿が見えなくなっていることから、地元の人はその橋を「姿見ずの橋」「面影橋」「暇乞いの橋」などと呼んでいた。

九郎の娘の小笹は父親の罪業を戒めようと、その橋から身を投げた。彼女の婚礼の夜、花嫁行列が屋敷を出て神田川にさしかかった時だった。

以来、姿見ずの橋は不吉な橋とされ、避けられるようになった。とりわけ、婚礼の際に花嫁が通ると不縁になると言われ、避けられていた。

橋の改名と浄め祭 この橋にまつわる忌むしいイメージを払拭しようとした人物もいた。一人は徳川家光だ。江戸時代の中野村は幕府の御鷹場で、家光公もしばしば鷹狩りに訪れていた。その折に姿見ずの橋の名のいわれを聞き、縁起が悪いので「淀橋」と改めさせた。あたりの景色が京都の淀川に似ているからだったという。

しかし橋の名前を改めたぐらいでは、土地に根付いた迷信は消えなかった。文明開化の世になっても花嫁行列は淀橋を迂回し、他の橋や田んぼの中の小道を通って行った。

これでは不便なので、中野町の実業家、三代目浅田政吉（1878―1932）が橋の供養をした。本家の五代目浅田甚右衛門（1889―1939）の祝言で、婚礼行列が都心から車で来る道筋に淀橋があったこともあり、橋の浄め祭をした。1913（大正2）年11月21日のことだ。当日は淀橋のたもとに祭壇が設けられ、婚礼の当事者、橋の兩岸の中野町と淀橋町（現新宿区）の住民と町長、政財界の名士が参列するなか、神主が祝詞を上げ、来賓が演説をした。柳田国男も招かれて「伝説の尊重と迷信の打破」という演説をしている。

祝言はその翌日に行われたが、数日たつと「浅甚の嫁御は病気になるかって寝込んでしまった」という噂が拡まった。これには浅田一族の夫人たちが憤慨した。「嫁が達者でいることを世間に知らさねば」と姑の志津は嫁の道子（1896―1990）を連れて親戚宅を訪ね、親戚側からも本家を訪問した。この

デモンストレーションを2、3度繰り返すうちに、噂は立ち消えになった。道子は夫と添い遂げて7人の子に恵まれ、長男が家督を継いだ。

伝説のゆくえ 浄め祭の折、淀橋は木橋だったが、関東大震災翌年の1924（大正13）年には鉄筋コンクリートの橋に架け替えられた。現在の橋はそれから更に4代目で、2005年に架けられたものだ。中野区と新宿区の境にあり、林立するビルの間を通る橋は7車線、両脇に歩道もあり、車や人の往来が絶えない。淀橋の由来を記した看板が橋のたもとになれば、陰惨な伝説が生まれるほど寂しい場所だったなどは想像もつかないだろう。淀橋伝説は、記念碑や書物の中でだけ語られる昔の物語になったのだろうか？

いやいやどうして。花嫁にまつわる迷信は失せても、別種の噂が囁かれている。都市伝説のたぐいで本気になる大人はなかるうが、そうしたものでも侮ってはいけない。都市伝説や迷信、噂話も、何世代にもわたって語り継がれれば「伝説」や「口承文学」と呼ばれ、郷土史に組み込まれていくのだから。柳田国男も言うように、伝説は常に成長して行くものなのだ。

※参考資料は最終頁に掲載



上高田地域紹介

子どもをあと押し！地域のちから

現在中野区は「子育て先進区」の実現に取り組んでいます。上高田は、中野区で最初のプレーパーク(※)の活動が始まった地域であり、また子ども食堂の数も多く、子どもを支える地域の活動が盛んなエリアです。今回は、「学習支援」と「遊び場」で子どもの成長を後押しする、上高田の地域活動の一部を紹介します。

※プレーパーク(冒険遊び場)とは、子どもが、自分の責任で自由に遊びたいという方針で運営されている遊び場で、全国に広がっています。

上高田の無料塾

「薬師 たきび塾」

「子どももおとなも集い、一緒に成長できる場所に！」がモットーの、主に上高田区民活動センターで活動している無料塾「薬師たきび塾」です。
いろいろな理由で、学校や普通の塾などがしつくり来ない中学入学直前〜高校2年生が、自分のペースで勉強できるようサポートします。現在、学年以外には特に参加の条件は設けていません。
講師はみんなボランティアです。教育のプロ集団ではありませんが、「親戚のお姉さん、おじさん」のように、基本的に個別に寄り添った対応を行います。

現在、都度申し込み制としており、いつでも気軽に参加できます。教材は基本的にその日にやりたいものを持参してください。教科書レベルを基本に、宿題、定期テスト、高校入試などに対応します。
ツイッター、フェイスブック、インスタグラム、ウェブサイトも使っていますので、「薬師たきび塾」で検索してもらえれば見つかります。参加申し込みもネットから。
一緒に楽しく学ぶ参加者をお待ちしています！



たきび塾風景

連絡先 yakushitakibi@gmail.com

上高田図書館の学習支援

「子どもの学習スペース」

上高田図書館では、毎週日曜日と祝日に、会議室を「子どもの学習スペース」として開放しています。ぜひ活用してください！(学校の長期休業期間は日時が変更になる場合があります)。
時間：9時〜17時
対象：小学生から18歳まで(保護者の同伴はご遠慮いただいています)
利用の際は図書館カウンターで申し込みをしてください。

中野区のプレーパークの草分け 上高田台公園運営委員会 「夢発見！草っパラダイス」

平成7年に上高田台公園がリニューアルした時から、子どもの居場所として「セミの羽化を見る会」や「こんぼまつり」等を始めました。
平成16年に中野区放課後子ども教室推進事業制度が発足してからは、同制度の受託事業として、プレーパーク「夢発見！草っパラダイス」を運営しています。

「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーに、子どもたちがやりたいことを自由に遊べる場です。プレーリーダー(遊ぶ環境を整える人)はいませんが、大人は場だけを留意して、子どもたち自身が遊びを考えて、ルールを決めます。

主な利用者は小学生ですが、世代を超えて多くの方が集まっています。

ベーゴマなどの昔遊びや弓矢づくり、穴掘りや木登り、野外料理など、自然と触れあいたい体を使って遊ぶ楽しさを経験できます。



プレーパークのモットーを掲げて



火を使った遊びもOK



おもしろ創作教室

「子どもたちと一緒に元気な育ち合いを実践しています」
NPO法人上高田パワーズ
「パワーズ オン サンデー」

NPO法人上高田パワーズは、昨年3月まで上高田児童館に併設されていた「上高田学童クラブ」の父会や上高田児童館運営協議会のメンバーの有志が集まって平成21年に設立されましたが、それ以前から各種行事の実行役として、上高田児童館とともに子どもの成長に寄り添ってきました。

東京都と中野区の助成を受けた「放課後子ども教室推進事業」として、各種教室事業を15年ちかく行っていて、現在は、月に2回の「日曜日児童館開放利用(フリーデー)」や「ビーズアクセサリー教室」「カプラ教室」おもしろ創作教室「ウクレレ教室」など、様々な企画イベントを通して、子どもたちの遊びや交流の体験の場を提供しています。

活動日時・場所
月1回から2回程度、日曜日の上高田児童館を自主開放しています。
10時〜15時(正午から13時まではお昼休み)
対象：18歳未満の児童、生徒、就学前の子どもとその保護者
事前の申し込み不要。参加費なし。
連絡先
上高田児童館 3388-6148
田川 090-7222-1060



おもしろ創作教室



カプラ教室

図書館からのお知らせ

中央図書館

・映画会のお知らせ

10月『海の上のピアニスト』

アメリカ・イタリアの合作
1999年日本公開 121分
(DVD上映、日本語字幕あり・音声ガイドなし)

内容:大西洋を巡る豪華客船で、生まれて間もない赤ん坊が見つかる。船上で育った彼は、成長するにつれ船内のピアノで数々の即興曲を作り出していく。ある日、美しい少女に心を奪われた彼は人生で初めて船を降りることを決心する。

日時: 令和5年10月28日(土)
10:00～/14:30～
※各回開場30分前。15分前よりブックトークを予定。

場所: 中央図書館地下2階
セミナールーム

定員: 各回15名(予約申込制/先着順)

受付: 令和5年10月7日(土)
9:00より

その他: 中央図書館カウンターまたは
電話 03-5340-5070 にて

P.2-3『中野長者伝説』主な参考資料

- 『中野の昔話・伝説・世間話』(1987年)、
『続 中野の昔話・伝説・世間話』(1989年)、
中野区教育委員会
- 『中野長者の寺 成願寺』成願寺誌編集委員会/編、
多宝山成願寺、1988年
- 『鷹の羽 浅田家々来』古簡荘浅田/著、私家版、
1959年
- 「橋姫」(『一目小僧その他』収録)、柳田国男/著、
角川学芸出版、2013年
- 『東京淀橋誌考』加藤盛慶/著、武蔵郷土史料学会、
1931年
- 『伝説と史実のはざまー郷土史と考古学』
比田井克仁/著、雄山閣、2006年
- 『骨が語る日本史』鈴木尚/著、学生社、2009年
- 『江戸名所図会4』斎藤幸雄ほか/著、筑摩書房、
1996年
- 『大日本地誌大系 新編武蔵風土記稿』
第1・3・6巻、雄山閣、1996年
- 『中野区の歴史』関利雄、鎌田優/文、東京にふる
里をつくる会/編、名著出版、1979年
- 多宝山成願寺 HP <https://www.nakanojouganji.jp/>
- 十二社熊野神社 HP <https://12so-kumanojinja.jp/>
- 東京都建設局 第三建設事務所 HP
<https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/jimusho/sanken/>

シビブリアからのお知らせ

図書館報『シビブリア』は、今号をもって休刊いたします。長らくご愛読いただきまして、誠にありがとうございました。

今後はSNSをメインに本紹介などを配信してまいりますので、引き続きご愛読のほど、よろしくお願い致します。

シビブリア編集部一同 2023年8月31日

中野区立図書館報

シビブリア

中野区立図書館報 vol.60

令和5年8月31日発行

発行人: 鈴木正実

発行: 中野区立中央図書館
シビブリア編集部

〒164-0001

東京都中野区中野2丁目9番7号

指定管理者 ヴィアックス・紀伊国屋書店 共同事業体

Musashi City Library Shinjyuku Eastside



中野区認定観光資源
2014



中野区立図書館 HP